
ある日幻想郷

黒詩鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日幻想郷

【コード】

N01070

【作者名】

黒詩鳥

【あらすじ】

秋の短編祭り第2弾として書きました^^

途中で用事ができて中途半端なところから再び書き始めたせいかあんまり話にオチがついてません
というかまとまりに欠けています

ですが、こんなでも楽しんで頂ける人がいたら幸いです
どうぞ最後まで楽しんでいってください^^

(前書き)

最初は考えがまとまっていたはずなんですが気づいたらでバラバラになって書きたいことが書けたのかすらかなり不安ですが多分書けたということ満足したいと思います(おい

このペースなら1日1本のペースで書いていけるかなとも思っています^^

ある日の幻想郷

ここは一日中、霧に覆われている霧の湖

チルノ

「また、霊夢に負けたわ！」

彼女以外誰もいない湖で彼女は叫んでいた

チルノ

「どうしていつもいつもアタイばっか負けるのよ……」

どう考えても負ける理由がわからず

次第にどこか諦めた感じで溜息をつくチルノ

そんなチルノの前にまだ夏で暑いというのに見ているだけで暑くなりそうな白黒の服の魔法使いが通りかかった

魔理沙

「珍しいなチルノが溜息を吐くなんて」

チルノはいきなり目の前に現れた魔理沙に驚いて尻餅をついてしまった

チルノ

「ちょっと、いきなり現れたら驚くじゃないの」

魔理沙

「それはすまなかつたな」

チルノ

「で、なによアタイは今から大事なことを考えなくちゃいけないの」

チルノの言葉に魔理沙は思わず吹いてしまった

魔理沙

「お前が考え事があるのか？どうした熱でもあるのか？」

チルノ

「うるさいわね！何アタイは何も考えたらいけないって言うの！？」

チルノはただでさえ機嫌が悪いのにさらに機嫌が悪くなってしまった

4

魔理沙

「すまんすまん、別に悪気があつたわけじゃないんだ」

チルノ

「なら、さっさとどこかに行きなさいよ」

魔理沙

「そんなに怒るなよ、代わりに私もお前の考え事とやらを聞いてやるからさ」

チルノ

「絶対に笑わない？」

魔理沙

「ああ、笑わないさ女と女の約束だ」

（氷精説明中）

魔理沙

「なるほど、また霊夢に負けたのか・・・いつものことじゃないか」

チルノ

「うるさいわね！アタイだってたまには勝ちたいのよ」

魔理沙

「そうか勝ちたいのか、ならば私に任せる私がお前を勝たせてやる！」

チルノ

「本当に!?!」

そんなチルノの問に対して魔理沙は自信満々に答えた

魔理沙

「ああ、そのかわりしばらくの間、私と一緒にいてもらうからな」

チルノ

「霊夢に勝てるのならそんなのいくらでもいいわ」

魔理沙はこの暑い夏を乗り切る者をやすやすと手に入れて満足していた

魔理沙

「霊夢に勝つのは簡単だ、今から私が渡すものを勝負する前に掲げて抵抗しないように言えばお前が勝てるだろ」

魔理沙はそう言うのとポケットから何かを取り出すとチルノに渡した

チルノ

「こんなので勝てるの？」

魔理沙

「ああ、効果てきめんだ早速試してきてもいいぜ」

チルノはそう言われると早速、霊夢のそこに向かって飛んでいった

魔理沙

「さあ、私も急いで追いつかなきゃな」

魔理沙は少しいたずらな笑いを浮かべるとチルノの後を追いかけていった

霊

「さて、お茶にでもしようかしら」

霊夢が境内の掃除も片付いてひと休みしようかとしていると

チルノ

「霊夢！！出てきてアタイと、もう一度勝負しなさい！！」

霊夢は息をつく暇もないのかと溜息を吐くと

霊夢

「一体何の用よ？」

チルノ

「さっき言ったでしょ！もう一度勝負よ！今度こそ勝ってみせるわ」

霊夢は半ば呆れながら

霊夢

「さっき負けたのにアンタも懲りないわね」

チルノ

「うっさいわね！！今度は必勝の策があるのよ！！」

チルノはそう言つと魔理沙から渡されたものを掲げてこう言った

チルノ

「さあ、霊夢これが欲しければ大人しくアタイにやられなさい！！」

霊夢

「誰がそんなものいるか・・・」

霊夢は最初自分の目を疑つたチルノが手に持っていたのは本来妖精が到底持つてないものであつたからである

霊夢

「チルノ、そのお金どうしたの？まさか私に勝ちたいために盗んだんじゃないわよね？」

チルノ

「そんなことするわけ無いじゃない！これはもらったのよ！」

そんな二人のやりとりを魔理沙は神社の木の上から見ていた

魔理沙

「面白くなってきたな、さあ霊夢はどう動くかな」

魔理沙もよほど暇なのか結果が分かりきった勝負をじっと見ていた

霊夢

「そう、盗んでないのね・・・」

チルノ

「だから、アンタはアタイに負けなさい!!」

チルノは霊夢の態度から自分の勝利を確信していた

霊夢

「なら、そのお金は私が勝ってあなたから貰うわ!!」

チルノ

「ちよ、え!なんでそうなるのよ!!」

想像していたのとは全然違う内容にチルノはびっくりして腰を抜かしてしまった

チルノ

「い、ごめんなさい、ゆ、ゆるして」

霊夢は攻撃が当たる寸前で攻撃を止めた

チルノ

「へ・・・あ」

チルノは体の力が抜けたのか膝を地面についた

チルノ

「ゆるしてくれるの？」

霊夢

「謝られる理由がわからないけど、別に謝ってる相手を攻撃するほど私は鬼じゃないわ」

そう言うと霊夢はチルノに手を差し出した

チルノ

「な、なによ握手なんてしないんだからね・・・」

霊夢

「何を勘違いしてるの？お金よお金。私が勝ったんだからしっかり貰うわよ」

チルノ

「・・・本当にがめついわね」

霊夢

「何か言った？」

チルノ

「べ、別に何も言ってないわよ！」

チルノはそう言つと持っていた金を霊夢に渡した

霊夢が満足そうに受け取ると

チルノ

「もうアタイは帰るわ・・・」

チルノは疲れはてたのか家に帰ろうとすると

霊夢

「チルノちよつと待ちなさい・・・私はこんな使えないもの要らないの本物を頂戴」

チルノ

「何を言ってるの？アタイが持つてるのは今渡したじゃない」

霊夢

「とぼけないでさっき見たやつ本物だったわ」

霊夢は目の前のお金の本物でないことが信じられないような顔をしていた

霊夢

「・・・チルノ、一つ聞いていいかしら？」

さすがのチルノもさっきまでの霊夢と雰囲気が違うことを感じたのか

チルノ

「え、ええ、何でもどうぞ」

霊夢

「このお金誰からもらった？」

チルノ

「それは魔理沙がこれを出すとあんたに勝てるって言うてくれたわ」

霊夢

「そう、魔理沙が渡したのね・・・」

霊夢は何をぶつくさとなにかつぶやいていると

魔理沙

「なんかやばい空気になってきたな・・・逃げよっと」

魔理沙はそう言つと箒を持って飛び去ろうとしたとき、いきなり目の前に霊夢が現れた

霊夢

「あら、魔理沙こんなところでどうしたの？」

魔理沙

「試合観戦だな」

霊夢

「面白かったかしら？」

魔理沙

「そこそこだな」

霊夢

「謝るなら今のうちよ」

魔理沙

「ああ、そうだな」

霊夢

「謝る気は無いの？」

霊夢はそう言つと臨戦体制をとろつとする

魔理沙

「・・・別に騙す気はなかったんだぜ」

霊夢

「そう、じゃあ試合観戦の代金を支払ってもらおうかしら？」

魔理沙

「お手柔らかに頼むぜ」

そう言つと魔理沙は静かに両手を上げた

霊夢

「そうね、今日の夕べはんを齎してもらおうかしら」

魔理沙

「まあ、それで許してくれるならいいぜ」

霊夢

「じゃあ早速行きましょう」

そう言つと霊夢と魔理沙は境内へと戻つてきた

チルノ

「あ、魔理沙よくも騙したわね、全然勝てないじゃない!」

魔理沙

「まさか霊夢があんなふういきなり攻撃するとは思わなかったんだよ」

霊夢

「まるで私が野蛮みたいに聞こえるわね」

魔理沙

「そんなこと言つてないぜ」

チルノ

「もう魔理沙の言う事なんて信じないからね!」

魔理沙

「まあまあそんな怒るなよお前も」
「飯奢つてやるからせ」

チルノ

「それは本当ね?」

魔理沙

「ああ、今度こそ女と女の約束だ」

チルノ

「じゃあ今回は許してあげるわよ」

魔理沙

「しかし思わぬ出費だぜ」

霊夢

「アンタが悪いんでしょう」

霊夢にそんなことを言われながら財布の中身を確認する魔理沙であった

(後書き)

楽しんでいただけたでしょうか？

今回はなんか書きたいことが分からなくなってしまうって少し反省しています

さて、本編の方も次の話が半分くらいまでできて今週中には続きを掲載できるかなとか思っています。初めてのの方も出来れば連載の方にも目を通していただけると嬉しいです^^

秋の短編祭り実施中ですので書いて欲しいキャラ（東方限定）などいたら感想でドシドシ言ってください

作者の出来る限りの範囲でやらさせていただきます

ついでに、こんな奇特な祭りに参加してやるぞって言う方がいればどうぞ言ってください

作者が喜びのダンスと共に活動報告の協賛者欄に追加します

最後にこの作品を読んでくださったあなたに最大限の感謝を捧げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0107o/>

ある日幻想郷

2010年10月28日04時10分発行